

令和7年度 学校経営の改革方針

令和 7年 4月
鈴鹿市立椿小学校

I 教育目標

1 学校教育目標

「自ら学び、力を合わせてやりぬく子どもの育成」

鈴峰中学校区統一キャッチコピー

“地域とともにたくましくチャレンジする鈴峰の子”

2 めざす学校像

- (1) 学力を身に付けた子どもを育む学校
- (2) 心身ともに健康でたくましい子どもを育む学校
- (3) 命と人権を大切に、安心して楽しく学べる学校
- (4) 家庭や地域と連携・協働する学校

3 めざす子ども像

- (1) 進んで学習に取り組み、自己実現に向けて努力することができる子ども
- (2) 心身ともに健康で、課題を乗り越えようとする子ども
- (3) 思いやりの心をもち、みんなと共に高まろうとする子ども
- (4) 地域に学び、地域と共に生きる子ども

4 基本方針

- (1) 学力向上のための指導方法の改善と指導力・ICT活用技能の向上
- (2) 心身ともに健やかな子どもの育成
- (3) 一人ひとりの自己有用感・肯定感を高め、共に生きる力を育成
- (4) 安全管理と安全教育の充実・徹底による安全・安心な学校の構築
- (5) 学校運営協議会の熟議を生かした学校運営、教育活動の充実、地域との連携による「地域とともにある学校」の創造

II 現状と課題

1 学力保障と学力向上について

(1) 自ら学ぶ力を育成するための授業改善・授業研究

① 授業改善と指導力の向上

・鈴教研研究委託研究会を予定通り実施した。中学校区と連携を深め、担任が学校の違う相担としてつながった。令和5年度は児童の学力に大きな伸びがみられた。令和6度も同様に研究を進めたが、研究発表会の後に行事が集中したことや、病休職員の補欠対応も重なって、児童に最適な指導や授業改善を十分に進められなかった。それらが、児童の学力定着に少なからず影響を与えた。

・学校運営協議会委員に授業公開し、アンケート等で保護者・地域の視点から意見をいただき、改善の一助とした。

・中学校区で連携して先進地視察を積極的に行い、授業改善・指導力向上につなげた。

② 基礎学力の定着

- ・算数の基礎学力の定着と復習を兼ねて、前学年のドリルに取組ませる「椿タイム」を年4回実施した。既習事項が網羅されており子どもたちも取り組みやすく、地域の学習ボランティアの支援を受けて進めることができた。
- ・「読み上げ計算」については、単元の導入時に必要に応じて活用した。
- ・読書活動、読む書くワークシートに取り組み、文字に慣れさせた。
- ・絵日記や作文指導等に継続して取り組み、文の構成や伝える力を育成した。
- ・漢字指導については多角的に学ばせ、チャレンジタイム等により定着を深めた。

③ 家庭学習の取組

- ・自主学習を家庭学習の一つと位置づけ、家庭と連携を図り実施した。
- ・家庭学習強化週間を年3回実施した。3学期は校区でも課題となっているスクリーンタイムの増加の解消につなげるため、「親子読書・メディアコントロール週間」とした。放課後時間の見直しを指導し、適切な目標時間を設定したため、目標達成率は増加した。しかし、家庭学習時間は減少傾向にあり、スクリーンタイムは増加している。家庭と連携して、さらに家庭学習の習慣づけに取り組んでいく必要がある。

④ 全国学力・学習状況調査、みえスタディ・チェック

- ・令和5年度から、鈴教研研究委託を受け、全職員での学力分析を行い、強みと弱みを確認し、研修課題を共通理解のもと、学びに向かう力を生かした授業改善を行った。
- ・4月の調査では、全国・三重県平均を大きく上回ったが、1月の5年生の調査では、国語・算数ともに大幅な低下がみられた。問題文や資料を適切に読み取る力、複数の条件を満たした作文など、思考力や記述する力が問われる問題に課題があった。また、算数では基本事項の定着不足による誤答も目立った。

⑤ 英語教育・多文化共生教育の推進

- ・1、2年生は月1～2回のEEタイムで英会話と外国の文化に親しませた。
- ・椿ワールドの開催に向けて、授業で学んできた英語を使い発表することができた。
- ・校内放送の中に、日常的に日本語と英語を混ぜ込み、行事ごとには英語で歌う音楽等を取り入れたり、ALTの先生との英会話教室のコーナーを設けたり、全学年で英語に慣れ親しむ活動を行った。

(2) 読書活動の推進

- ・「未来応援人」の読書活動推進の出前授業を行ったり、図書巡回指導員に指導してもらったりして本に親しみ、学校図書館を訪れるきっかけ作りを継続した。図書委員会のイベント企画、読み聞かせ、本紹介、購入する本の選定、図書館整備、ブックトーク・「お話宅配便」等、多彩な読書活動と、通信を通して家庭での読書活動の啓発を行った。児童アンケートにおける「普段から読書をする」では、4.6%増加し、貸出冊数も平均80冊となった。

(3) ICT活用の推進

- ・ICTサポーターが計画的に授業に参加したり、職員への研修会を実施したりして、紹介されたアプリの活用を行った。
- ・授業等で、児童が必要に応じて活用できる時間が大幅に増えた。高学年は連絡帳として、また、オンラインで中学校と交流し、積極的に関わろうとする態度の育成を図るなど活用の幅も広がった。全体的に児童の技能は高まったが、一部の児童には苦手意識も感じられる。

(4) キャリア教育・地域学習

- ・「未来応援人」や「ゲストティーチャー」の招聘を全学年年間7回以上、計55回実施し、出会いを通じて「生き方」や「考え方」を学ぶ機会とした。(昨年比+24回)
- ・発達段階に応じ、地域と連携した活動を行った。非認知能力で「役に立ちたい」という児童は多く「社会性」は高い。しかし、「自制心」については低い傾向にある。また、「自己肯定感」

については、改善傾向にあるので、今後も出会い学習や体験学習を通して、児童の視野を広げていく必要がある。

(5) 特別支援教育の推進

- ・特別支援コーディネーターを中心とした校内体制にスクールカウンセラーも加わり、必要な子どもや保護者には適宜面談や支援会議を複数回行い、改善に繋げることができた。
- ・30日以上欠席がある児童は2名である。

4 健やかな心と体の育成

(1) 基本的な生活習慣の定着

- ・年3回、校区で家庭学習・読書強化週間を設定した。チェックシートを活用し、家庭との共通理解を図り、基本的な生活習慣の定着と連携させた指導を行うことができた。しかし、家庭での過ごし方は、全体的に年々低下している現状にある。
- ・ゲーム・スマホ3時間以上の児童が増加し続け、コントロールできない状況にある。
- ・月1回程度、児童会主体のあいさつ運動を行っているが、意識が低くなっており、取り組みの改善が必要である。

(2) 基礎体力の強化

- ・令和5年度の新体力テスト分析結果をもとに、体育の時間の最初に、計画的に全校共通した弱みを強化するサーキット運動を取り入れ、弱み改善をおこなう予定であったが、令和6年度は、十分に行うことができなかった。
- ・「わくわくタイム」や「冬の運動デー」などで、積極的に体を動かす機会を設けた。依然として、柔軟性や瞬発力に弱みがみられる。

(3) 縦割り班活動の推進と、人間関係や社会性の育成

- ・月1～2回の「わくわくタイム」、月1回の「児童集会」や毎日の清掃活動は縦割り班を使うことにより、自分の学年以外の児童との触れ合いの場を設けた。
- ・校外学習等でインタビューを行う場を設け、全学年で会話を重視した活動を実施した
- ・昼の放送でインタビューコーナーを設け、児童がゲストとなって会話をする活動を行った。

5 安全安心な学校づくり

(1) つながりを育てる学級づくり

- ・児童の自己肯定感・自己有用感を向上させることを意識して、寄り添い、教師と子どもの関係を築くことができた。
- ・情報交換等を日常的に行い、欠席理由の確認や問題行動等は、早期発見・早期対応に努め、基本は複数体制で組織的に対応することができた。

(2) 登下校の安全の確保

- ・定期的な通学路点検と、職員・保護者・地域によるパトロールを実施した。「椿っ子見守り隊」への登録や「8・3運動」の参加呼びかけを地域や保護者に行った。
- ・「子どもを守る家」の更新、依頼をPTAと協働して実施した。
- ・鈴峰中学校区の小中と連携し、交通指導、あいさつ運動を行った。
- ・地区児童会や交通安全教室を開催し、安全確保に向けた情報発信と指導を行った。
- ・メール配信等による「不審者情報」の的確な伝達を行った。

(3) 危機管理マニュアルの見直しと校内体制の整備

- ・危機管理マニュアルを定期的に見直し、教職員の危機管理意識の向上を図った。
- ・メール配信システムを活用した緊急引き渡し訓練を実施した。

6 地域とともにある学校づくり

(1) 鈴鹿型コミュニティスクールの推進

- ・学校運営協議会を年 6 回開催し、校内行事や授業参観をしていただき、学校としての強みや弱みを検討するとともに、地域・保護者との協働による学校運営を行った。
- ・校区で拡大運営協議会を持ち、中学校区としての課題の共有や情報交換を行った。
- ・校区の人権フォーラムに参加していただき、誰もが暮らしやすいまちづくりをテーマに地域の人権課題を見守り・生徒と一緒に考えた。

(2) 保護者や地域との連携

- ・教育活動への保護者・地域住民の参画を推進する。(各種ボランティア等)
- ・学校だよりを年 36 回程度発行し、情報提供を行った。
- ・学校アンケートを学期に 1 回調査することにより、現状の成果や課題を学校側が把握でき、結果を通信等で伝えることにより、学校課題を共有してもらうことができた。

(3) 学習ボランティアの活用

- ・読み聞かせ、学習支援ボランティアを活用し、読書活動推進、学力定着を図った。
- ・授業、クラブ、椿ワールドなどの行事、椿タイムなど地域Coと連携した適切な体験、学習ボランティアの活用により、行事の支援や充実につながった。

7 教職員の総勤務時間の縮減

(1) 職員会議の時間短縮

- ・提案内容や分掌での引継ぎ内容等クロームブックでデータ管理することで、時間短縮を図った。打ち合わせも水曜日の放課後のみにし、情報共有をデータで行った。

(2) 校務の取り組み方の見直しと教職員の意識改革

- ・適所適材の校務分掌、行事や教育活動の焦点化、業務内容の精選・見直しを行った。
- ・研究発表会、病休職員の補欠等で勤務時間が増加し取組の成果が表れにくかった。

Ⅲ 重点目標

(1) 学力保障・学力向上と指導の充実

学力保障・学力向上を図るための授業改善の方策を検討し、指導力向上をめざす。

(2) 健やかな体の育成と豊かな心の育成

全ての活動の基盤となる健康な体を育成する。

非認知能力を育み、自他の大切さを認め、共に生きる力を育成する。

(3) 安全安心な学校づくり

安全・安心な学校をつくるため、安全管理と安全教育の充実・徹底を図る。

(4) 地域とともにある学校づくり

家庭・地域と連携して学校運営の改善と教育活動の充実を図る。

(5) 働き方改革とコンプライアンス意識の向上

総勤務時間の縮減とコンプライアンス意識を高める取組を推進する。

Ⅳ 本年度の行動計画

1 学力保障・学力向上と指導の充実

(1) 自ら学ぶ力を育成するための授業改善

① 授業改善と指導力の向上

- ・鈴峰中学校区連携の一環として、4校と協働で複線型授業研究に取り組む。
- ・研修課題に沿った授業改善に取り組み、全教員が年間1回以上の研究授業を実施する。
- ・自主的な校外研修への参加や外部講師を招聘した授業研究を計画的に実施する。

- ・課題をみつけ解決する過程を重視し、教師がめあて〈ゴール〉を明確にした授業に取り組む。日々の実践で、授業力 UP5 を活用する。
- ・授業に対する児童満足度90%以上を目指す。

② 基礎学力の定着と学力向上(既習事項の定着につながる学習指導)

- ・全校で取組む授業開始時の「読み上げ計算」の活用
- ・4～6年生の椿タイム(前学年の補充学習)を年5回実施する。
- ・TT、複数配置による個別の授業支援
- ・ICT活用技能の向上と、タブレット端末による個別最適な学習を推進する。
- ・家庭学習の習慣化にむけた指導(家庭学習 UP5)および保護者への啓発に取り組む。

③ 全国学力・学習状況調査、みえスタディ・チェックの活用

- ・全国比(県比)平均+5を目標として、学力の向上を図る。
- ・全職員で調査結果を分析し、各学年に応じた弱みの把握と、課題克服に向けた授業改善を各学年で図る。

④ 言語能力・活用力の向上

- ・音読指導と既習漢字の習熟を図る。国語辞典は低学年から活用する。
- ・図書巡回指導員、図書委員会、図書ボランティアと連携し、新聞の活用や朝読書の継続を含め、全校で読書活動を推進し、読解力・表現力の向上を図る。貸出1人年80冊目標
- ・「ブックトーク」・「お話宅配便」・「味見読書」などの読書活動を年間18回以上実施

(2) 特別支援教育の推進

- ・TTや交換授業、合同授業などを行い、全職員で子どもを支える体制を整える。
- ・特別支援教育コーディネーターを中心とした支援体制のもと、週1回の打ち合わせで情報交換と共通理解を図る。また、全教職員の理解をすすめ、スクールカウンセラー等と連携して具体的な支援の方策を探るなど、支援内容を充実させる。

(3) 多文化共生教育の推進

- ・全学年で外国語活動を推進し、異国の文化に触れるとともに、ジェスチャーや会話を重視した英語活動を実施する。1、2年生は月1回程度のEEタイムをおこなう。
- ・「椿ワールド」(英語活動)を開催し、英語の活用とともに表現力を身に付ける。
- ・外国籍の人々を講師に招き、国際理解教育を実施する。

(4) 総合的な学習・生活科・行事における非認知能力の育成、キャリア教育、情操教育の推進

- ・「未来応援人」や「ゲストティーチャー」の招聘を全学年、年間5回以上実施し、「生き方」や「考え方」を学ぶ機会とする。
- ・発達段階に応じ、地域と連携した事業を推進し、地域の一員としての自己有用感を築く。

(5) ICT教育の推進

- ・計画的にICT支援員と連携を進め、授業の中で積極的に活用する。
- ・日常的な活用を進めると同時に、家庭学習や校外連携等にも活用する。

2 健やかな体と豊かな心の育成

(1) 非認知能力を育み、つながりを育てる学級、学校づくり

- ・気持ちに寄り添うことで児童との信頼関係を築き、かかわりを通して、個々の児童の自己肯定感・自己有用感を向上させる。
- ・縦割り班活動を推進し、人間関係や社会性の育成を図る。わくわくタイム(異年齢遊び)年15回、児童会主催による学校集会年6回、縦割り班清掃活動など。
- ・校区で連携して生徒指導・人権について教員研修会をもち、児童生徒についての情報交換を通して、中学校生活への不安を解消する。

- (2) 体力、運動能力の向上
 - ・体育の時間の最初に、弱みを強化する「5 分間サーキットトレーニング」を継続して行う。
 - ・体を動かす活動や遊びの保障をする。わくわくタイム、体育委員会による運動デーなどを企画する。
- (3) 基本的な生活習慣の定着
 - ・年3回校区で家庭学習・読書強化週間を設定する。チェックシートを活用し、家庭との共通理解を図り、基本的な生活習慣の定着と連携させた指導を行う。
 - ・年 2 回学校アンケートをとり、家庭での過ごし方を振り返る機会とする。
 - ・児童会主体のあいさつ運動を適宜実施し、啓発を継続する。
- (4) 学校生活についての満足度向上と不登校を生まない学校体制
 - ・不登校を生まない取組に向け、職員が共通意識を持って対応する。欠席理由のあいまいな児童に対する家庭との連携を密にする。場合によっては児童・保護者のニーズに応じて別室登校や時間差登校、一部オンライン学習についても検討し、不登校 0 人、「学校が楽しい」児童の割合90%以上を目指す。
- (5) いじめを生まない学校体制づくり
 - ・アンケートによるいじめの把握(年3回)組織的な対応と指導と未然防止啓発活動の充実。
 - ・いじめや問題行動の早期発見・早期対応に努め、基本は複数体制で指導する。「いじめ解決 100%」を継続する。「いじめがないように行動できる」児童の割合 100%を目指す。

3 安全安心な学校づくり

- (1) 登下校の安全の確保
 - ・校長・職員による登校指導、危険箇所等の通学路点検と、職員・保護者・地域によるパトロールを実施する。「子どもを守る家」の確認を PTA と協働して実施する。
 - ・交通安全教室(自転車の乗り方指導)を全校で実施する。
- (2) 防犯教育の充実
 - ・防犯訓練の実施及び、メール配信等による「不審者情報」の的確な伝達を行う。
- (3) 危機管理マニュアルの見直しと校内体制の整備
 - ・危機管理マニュアル、校区安全安心マップを定期的に見直し、教職員の危機管理意識の向上を図る。
 - ・緊急時にはメール配信を活用した緊急引き渡しを実施する。

4 地域とともにある学校づくり

- (1) 保護者や地域との連携強化
 - ・PTA や地域の有識者メンバーで組織された学校運営協議会を年 6 回開催し、熟議により学校の課題を解決する。また、学校関係者評価をおこなう。
 - ・学校だよりを年間30号以上発行、及びホームページの更新で情報提供を充実させる。
 - ・教育活動への保護者・地域住民の参画を推進する。
- (2) 学習ボランティアの効果的活用
 - ・適切な体験学習ボランティアの活用により、授業(ミシン、裁縫、調理等)、クラブ、その他の行事等の充実を図る。

5 働き方改革とコンプライアンス意識向上

- (1) 総勤務時間の縮減・休暇取得促進
 - ・連絡・提案内容、引継ぎ文書等の共有についてクロームブックでのデータ管理を進める。

- ・職員打ち合わせは、クラスルームを使用して、週1回水曜日の放課後に効率よく行う。
- ・校務の取り組み方の見直しと教職員の意識改革を進める。教職員一人ひとりの強みを生かせる校務分掌を行うとともに、行事を精選し、業務内容の見直しを行う。

○放課後60分以内に終了する会議	70%以上	(R6 56.5%)
○定時退校日の達成率	80%以上	(R6 66%)
○年360時間を超える時間外労働者数	0人	
○一人当たり月平均時間外労働	20 時間未満	(R6 26時間)
○平均休暇取得日数	23日以上	(R6 12日)

(2) 職員のコンプライアンス意識の向上。

- ・打合せ・会議等で毎回、校長からコンプライアンスについての話をするとともに、年1回以上のコンプライアンスミーティングを行い、不祥事の根絶に向けて職場全体で取り組む。